

子どもと家族と学校と

⑮

『開業カウンセラー学校へ行く』

CON（こん）カウンセリングオフィス中島

中島 弘美

当オフィスは家族の心理支援をする個人開業の相談機関で 1995 年にスタートした。

独立をする前の私は、家族療法を専門とするクリニックに心理カウンセラーとして勤務し、不登校や対人恐怖症、摂食障害のカウンセリングをしていた。その頃、まだ数少ない民間の心理療法施設は、オーナーが精神科医であったため医療機関のような雰囲気があり、カウンセリングをするときは白衣を着ていた。

個人開業をしてからは、白衣の代わりにジャケットを着て面接をするようになった。個人で相談を受けるようになると、自分の流儀とはどうあるべきか、服装に限らず、何かと意識をした。

そのひとつに『歩くカウンセラー』でありたいということがあった。

歩くカウンセラー

相談に来られる家族を面接室で待っているだけでなく、できるだけ自分自身の目で見えて聴いて感じたいと思っていた。フィールドワークを視野に入れて支援をしたいとの思いから実践したことが、カウンセラーの学校訪問だった。

「担任の先生のところへうかがって、学校での生徒さんの様子をお聞きしたい、面接室でのやりとりで子どもさんのこと

をわかった気になってはいけないし、ご家族からの話しかけだと一面的になってしまう、できれば多方面から理解したい」と思っていた。

学校訪問

学校訪問までの流れは、こんな感じだ。不登校など支援が必要な状態にある生徒さんとそのご家族が相談を希望されると、まずは電話で簡単に様子をおききする。→カウンセリングの進め方について納得していただくと、面接予約日時を決める。→当日約 90 分の初回面接をする。そのなかで今後の方針を話し合い、ご家族の希望を確かめる。→ご本人が通っている学校に出向き、学校の先生方とお会いするというプロセスだ。

日々、子どもの生活に関係している人々が協力して問題解決をするという支援方法はごく自然なことだと考えていたが、中には、「民間のカウンセラーによく学校の先生が会ってくれるね」と感想をもらうこともある。

学校訪問を申し出ると、対応批判をするためにカウンセラーが学校に来るのではないかの懸念からか、しぶしぶ応じていただく場合もある。学校にクレームをつけに行く気は全くないが、部外者であることは確かなので、事前に家族から担

任教員に、「カウンセラーが学校に行きたいと話している」と伝えてもらっている。すると、誤解は生じにくい。

最近でこそ連携が当たり前になっているものの、子どもの問題解決のために協力的な学校と消極的な学校があるが、三者が協力をしてバランス良く関わりながら、子どもの問題解決へつながることを目的として、学校訪問をしている。

学校訪問 1

学校での子どもの様子を知る

学校関係者と連携するために学校訪問するポイントは3つあると考える。

第一は、不登校など問題を抱えている状態にある児童や生徒さんの情報を共有すること。

担任や教科担任、学年の教員、部活顧問、前年度の担任、養護教諭など、学校で子どもにかかわっている人にお会いし、それぞれの立場からみた子どもさんの様子を教えていただく。すると面接室では語られなかった話題や、両親も耳にしたことのないエピソードが浮き彫りになることもある。たとえば、

「音楽の時間に、楽器の演奏ができなくて体が硬直して、ほろりと涙を流していたことがあった」

そのように、学校の先生方からとても貴重なできごとを知らせていただけるので、いろいろな情報を得る中で、家族からの話と学校関係者との話を合わせて理解を深めていく。

学校訪問 2 学校のルールを知る

子どもが困難な状態になり、学校の先生方がサポートするときの方法は、私立公立校に限らずそれぞれに特徴がある。学校によっては、専任のスクールカウンセラーや学校ソーシャルワーカー、別室登校対応の支援員が常駐していて専門的な対応をしているところがある。また、教育相談や生徒指導担当の教員が決まっています。不登校生徒のための特別委員会でも対応を決めているところもあり、さまざまだ。

担任の意見重視や学年全教員の判断が重視されるなど、進級留年判定等のプロセスなどは、学校のルールを把握する必要がある。

一度きりの訪問ですべて学校の情報を提示されることはまずないが、明記されている文書はすぐに内容を確認しつつ、家族面接の様子を随時学校側に報告するやりとりのなかで関係を作りながら、徐々に学校の動き方や、決定過程を知り、把握していく。

私がこれまでかかわってきた学校は、CONに意見書や報告書の提出を求められることがたびたびあった。カウンセリングに通っていることは、回復の努力をしているとみなされて、通った日にちについては公欠扱いになった。個人開業の相談機関が学校に信頼されていることに大きな意味があると思う。そうすると子どもや家族は安心をしてカウンセリングに通うことができるようになる。

学校訪問 3

再登校に役立つヒントを探る

これは、子どもが再登校の準備を考え

られるほど落ち着いてきたら、学校の敷居を低く感じるために、何か行動に移せることはないか、そのヒント集めをすることだ。

たとえば、学校が認める登校スタイルを教えてもらう。図書室登校、進路指導室、保健室など教室ではなく別室に行くことで出席になるのか。また、職員室へあいさつに行くだけや部活だけの参加も出席として認められるのかなどを確認する。

時間的に、午後からの登校や、一時間だけの授業出席は可能か。さらに長期休みに登校練習をしても良いのかなど、出席条件や学校側の受け入れ体制を知ること、大きな収穫になる。

学校の設備のなかに、他の生徒とは全く顔を合わせないで通うことができるスペースが存在していると、そこだったらチャレンジできそうという気になることがある。

また、修学旅行や研修、遠足や芸術鑑賞会など学外での行事や、本人が関心を示すイベントなど、参加しやすいものはないかなどたずね、再登校のきっかけのヒントを探る。

参加できるかどうかは別にして、授業以外の行事だったら行ってみたいと思う場合もあり、長期に学校を休んでいる生活でも、所属している学校行事の話題や、季節の出来事を知ることが、子どもと家族とともに負担にならない程度に把握しておくべきことだと考える。

さらに、協力的な学校の場合は、学校側から他の不登校の生徒への対応例などを知らせていただくことがあり、特別な配慮の例や学校側の柔軟な対応例を確認

することもでき、大きな手助けとなる。

通学路を歩いてみる

予想しない副産物があったりするのが学校訪問の魅力でもある。それは、実際に歩いてみて感じる地域や学校の様子だ。

「あの坂がいやだー」

と、顔をゆがめて話す新中学一年生の男子。大きめの制服が目立つほど、身体が小さく、声も子どもっぽい。

「朝、学校に行くとき、学校の最寄り駅から校門までが急な坂道なので通学がつらいと話しています」

母親が説明する。登校のつらさすべてが不登校とつながっているわけではないが、登下校の負担があるようだ。試験に合格して私立学校の一年生になり、何もかも初めての新しい生活が始まって戸惑うことが多い中、大きく違いを感じるもののひとつに通学があった。

学校訪問をするときに、彼が話していた同じ通学路を歩いてみた。

確かに中学一年生の小さな身体で教科書や体操服の入った重たいカバンを持ち、慣れない革靴でこの坂道を登るのは、いやなのだろうとわかる。

山の上にある学校の環境はとても良いが、あの坂は急でつらいため保護者会るとき親たちはタクシーを使うという。卒業までかなり体力がつかますよという学校側の解説は、こういう意味も含まれているのだとしっかりわかる。

通学路を歩いてみたあとの面接では、

「あの坂道だったら、車で送り迎えしてほしいって言っていたけれど、わかるわ～」と実感を込めて話しながら、相互理解

が深まり家族とのカウンセリングができる。

学校や地域の雰囲気に触れる

初めて学校を訪れて、校内に入っていくと、ごくありふれた日常の雰囲気からおのずと伝わってくるものがある。

ある学校は、出会う生徒さんたちから訪問者に対して「こんにちは」とさわやかなあいさつ！しかも、ひとりだけでなく、出会うひとすべてなので驚く。

ある学校は出入り口に警備員がいて、名前を告げて訪問の趣旨を伝えると、お待ちしていましたとあいさつされ応接室に通される。連絡が行き届いていることに感心する。

放課後クラブ活動をしている子どもたちが熱心に練習していたり、ジュースを飲んでのんびり笑いあっていたり、下校途中の会話が耳に入ると、どんな話題で盛り上がっているのか、思わず注意を向けようとして、ふと発見する。

「この男子生徒の髪型はアイドル系だ！さらさらの髪が肩まである！だから、あの髪型なのか」

と面接室での様子を思い浮かべて妙に納得する。謎が解けていく感じだ。

そして、学校がどのような地域の中にあるのか歩いてみると、一戸建て庭付き分譲の新興住宅地が多く目についたり、学校の近くに越境入学反対の看板があったりする。大きな商店街があり商売をしている家が多いところ、駅前に学習塾があちこちにある地域など、行ってみでの発見があり、その地域の特性をさらりと感じる。こういうところで暮らしている

のだと、環境も含めて子どもたちの理解が深まっていく。

独立相談機関

だからこそできる役割

子どもと家族と学校の理解をしつつ、支援をしたいと考えるCONの特徴は、どこかの付属機関ではなく、独立した立場で家族の相談を受けられることにある。つまり、来られている家族の意向に忠実に沿うことができると考えている。

詳しく記してみると、学校内のスクールカウンセラーに相談を持ちかける場合は、中立な立場ではあるとはいふものの、学校の関係者であるため、できるだけ在籍している学校に再登校することや留年してでも良いから学校に戻りましょうという対応に流れる可能性があるかもしれない。

今後の進路を考えると、在籍する学校のカウンセラーに転校したいとはい出しづらくなってしまいうだろう。その点、独立した相談機関の場合は、転校することを視野に入れた話しあいも自由にでき、本人と家族の意向に沿った支援が実現する。

さらに転校後も変わらずカウンセリングを継続できるし、卒業してからのサポートやフォローも可能というのも大きな利点だ。家族はときに学校側には伝えたくない事情などがあり、さまざまなことをオープンできないこともある。完全に家族のプライバシーを守ることができライフステージが次の段階に移っても、家族の応援団として長期支援の役割ができる。